

研究レポート

イスラーム・スペインにおける言語事情

——“Substratum”理論からの一考察——

石原忠佳



〈スペイン語が他のロマンス諸語と比べて、かなりきわだった独自性を呈するのはアラビア語の影響である〉との、数多くの研究者の指摘にもかかわらず、今日まで、アラビア語研究やスペイン語研究が、それぞれ個別になされてきた感がある。この2つの言葉を、当時の歴史舞台の中で関連づけ、言語学史的にその全体像にせまる、というアプローチに欠けていたとは言えまいか。とりわけ、8世紀以降のイベリア半島において、話し言葉、書き言葉がいかなる変遷をたどったかというような、歴史言語学的考察は本邦ではきわめて稀であろう。——確かに、『アラビア語から由来するスペイン語の語彙』などといった語源学上(etymological)あるいは辞書学(lexicological)の研究については、若干の資料もあるようであるが——

そこで今回の考察は、以下のような論点に焦点をあてて展開されることになる。

① 8世紀のイベリア半島のスペイン語は、ラテン語が今日のスペイン語にいきつく途中の過程のものであった。

② アラブ人がスペイン社会に定住していく過程での問題点。

a) アラブ人支配下のスペイン人は、彼らの日常語にどの程度のアラビア語を取り入れたか。

b) 当時のスペイン人にとって、口語アラビア語はどのような音として耳に

聞こえ、さらに彼らはそれらを、どのようなスペイン語の文字で表記したか。

③国土回復運動——スペイン語ではレコンキスタ (reconquista) と呼ばれる——の過程で、次第にキリスト教徒の支配下にアラブ人が置かれ、いっぽう国外へ去るアラブ人もいた。

- a) 当時、アラブ人たちが話したスペイン語には、どのような特徴があるか。
- b) アラブ人たちは日常のスペイン語を、どのようなアラビア文字の表記で置きかえていたか。

0. 序

「アルハミアダ」とは「アラビア文字で綴られたスペイン語の文章」——当時のスペイン語はロマンセ (romance) と呼ばれていた——を意味する。

スペインにおける国土回復運動 (711～1492) で、イベリア半島から多くのアラブ人が放逐されたが、その後スペインの地に残留してキリスト教に改宗したモリスコ (morisco)——日本語ではムーア人またはモーロ人——また国外に出たモリスコは、彼らの母国語であるアラビア語文字を使ったスペイン語で、一連の文学を生み出すことになる。モリスコのスペイン語には、発音上、当然アラビア語訛りがあり、さらに、彼らが当時のスペイン語を自身の文字を用いて綴っていたことから、母国語の発音、言語形態——語彙上、形態論上、統語論上——が多くの面において、彼らのスペイン語に影響を及ぼした事実、基層言語理論 (substratum theory) から明瞭に指摘できる。

1. イスラーム・スペイン史の概要

サラセン帝国の拡大にともない、北アフリカを征服したアラブ人は、被征服民ベルベル人をしたがえて、711年南スペインに上陸した。50年たらずでシリア、ペルシア、北アフリカ、シシリアを手中におさめたイスラーム教徒にとって、スペインのイスラーム化は、わずか7年間に要するにすぎなかった。多くのキリスト教徒は、イスラームの支配下におかれ、次第にキリスト教的痕跡

が失われていくなかで、改宗の道を選んだ。イスラーム教に改宗したキリスト教徒は、アラビア語でムワッラドゥーン、スペイン語で「ムラディー」 (muladí) と呼ばれている。しかしながら、従来のキリスト教を保持し続けた者も多数にのぼる。彼らは「モサラベ」 (mozárabe)——アラビア語では、「ムスタリブ」——と呼ばれ、当時のスペイン語であるロマンセを話し続けるのだが、アラビア語の混入により、ここに、二重言語併用の地域社会が登場する。

文学上では、独得な叙情詩⁽¹⁾や在住のアラブ人が好んで使用したセヘル (zejel)⁽²⁾と呼ばれる詩形が誕生した。時の流れとともに、イスラーム支配下のモサラベは、アラビア語で読み書きを行い、数多くの語彙がアラビア語からロマンセに取り入れられるようになる。イスラームの支配を免れてキリスト教の勢力下にあったスペイン北部から、文化面、行政面で孤立を余儀なくされた南部のモサラベは、次第に家族の間でのみロマンセを用いるようになり、ここにロマンセは古語化の一途をたどる。このような状況下、北部のレオン地方、カスティーリャ地方に移民したモサラベも相当数にのぼり、アラビア語のスペイン北部への拡張もみられるようになる。

いったんはほぼ完全に、イスラーム教徒によって支配されたイベリア半島であるが、これ以後約800年——1492年まで——にわたってキリスト教勢力による国土回復運動が続けられた。1085年にトレド、1118年にサラゴサがキリスト教徒の手に陥落し、以後は、アラブ人が次第にキリスト教徒の支配下に置かれるという事態が展開する。モサラベとはまったく逆の状況、すなわちキリスト教支配下で改宗することなく定住し、その支配に従ったイスラーム教徒——スペイン語でムデハル (mudéjar)、アラビア語でムダッジャン——の数が増大するのはこの時代である。1492年、グラナダの奪回で国土回復運動は完了し、フェルナンド王とイサベル女王の婚姻は統一スペインを誕生させ、ここにイスラーム・スペインの終末が訪れる。多くのアラブ人がイベリア半島を去るのだが、その後キリスト教に改宗し、スペインの地に留まることを潔しとしたイスラーム教徒もいる。彼らこそがとりもなおさず、本小論のテーマとなるモーロ人であり、アラビア文字で表記されたスペイン文学、つま

りアルハミアダ文学(literatura aljamiada)を生むのである。

2. 16世紀以後のモーロ人

16世紀以後、スペイン社会に居住したり、異国の地で暮らすようになったモーロ人の、習慣や生活様式面での同化はさておき、言語上の適応の過程は、その居住地によって様々であった。

- a) アラゴン地方に定住したモーロ人は、当時のスペインのキリスト教的社会機構に適応していた——農業、牧畜さらに商人として——ことから、アラビア語は彼らの間で消滅の一途をたどる。
- b) バレンシア地方のモーロ人は、都会から離れて居住していたことから、イスラーム教的儀式、慣習は残存し、アラビア語も失われることなく、16世紀を通じて健在であった。
- c) グラナダ地方では、16世紀の教会勢力と政治権力の癒着により、数多くのモーロ人が経済的、政治的圧力を受けた。その結果各地で騒乱が勃発し、カスティーリャ(castilla)地方へ追放されたモーロ人も増加した。アラビア語はグラナダ地方において1570年の騒乱まで保持された。
- d) その他の地方では、アラビア語はほとんど消滅してしまい、ごくわずかな単語にその痕跡をとどめたにすぎない。
- e) 他方、アフリカ方面へ移住したモーロ人は、当時のスペイン語を18世紀さらに19世紀前半まで保ち続けた。このようなことから、今日北アフリカ地域の人々の姓名の多くに、スペイン語的なごりがみられる⁽³⁾。特に、モロッコのフェズ(Fez)やテトゥアン(Tetuan)には、南スペインに由来する多数の姓名が残っている。さらにチュニジアでは、オスマントルコ政府の保護政策のもとに、モーロ人のための自治区域、学校(madraza)、モスクなどが創立された。しかしながら、原地の住民と日常生活面で同化することを好まなかったモーロ人の間では、スペイン語はきわめて完全な形で受け継がれた。こうして、イベリア半島に遅れて、この地方にもアルハミアダ文学が開花することになった。

3. アルハミアダ文学

モーロ人がスペインのキリスト教社会に適応できなかった理由の一つに、彼らの言語をあげることができる。アラビア語はイスラーム教徒にとって、単に独自の文化を表現する言語にとどまらず、神が人間に啓示を与えた最初の、最も完全な言語であると考えられている。このアラビア文字を、イベリア半島のアラブ人が、外国語を書き下す際にも使っていたという事実は、《発音と文字の相関関係》という観点からしても、きわめて興味深い。

アルハミア(aljamía)なる語彙は、アラビア語の《'ajam》の形容詞《'ajamī》⁽⁴⁾に由来し、元来、「アラビア語ではないすべての事柄」を意味する。それ故、アラビア語以外の言語は、モーロ人にとって《'ajamīya》⁽⁵⁾であったが、スペイン語においては、ローマ字以外で書かれたすべての文字を《aljamía》と呼び、特にアラビア文字をその典型であるとしてきた。当時のスペイン語がアラビア文字で書かれたのは、いつが最初であるのか、正確な年代は知られていないが、今日保存されているもので最も古い文献は、11世紀のハルチャ(jarcha)であるとされる⁽⁶⁾。

さらに当時、スペインに居住するユダヤ人も、ヘブライ文字を用いて、アラビア語やロマンセを綴っていた。今日でも、セファルディー(sefardí)と呼ばれるイスパニア系ユダヤ人のなかには、この伝統を引き継いで、ヘブライ文字をもって外国語を綴る者もいる⁽⁷⁾。ローマ字化の進む当時のスペインで、ムデハルやモーロ人は依然アラビア文字を用いてロマンセを綴っていたが、アラビア語自体は、もはや話し言葉としての機能を失いつつあった。

しかしながら、モーロ人によって発音される当時のスペイン語の話し言葉は、音韻上、イスパニア人のそれと相違があったことから、政治政策の上でも、イスパニア人と彼らを区別するのに、言語学上の発音的特徴をその根拠としていたことは、注目に値する。

4. 言語学的諸相

以上、アルハミヤダ文学に関する歴史的、文化的考察は、その厳密な言語学的分析を試みるための総括的なアプローチであった。だが、スペイン語の初期から近代に至るまでの様々な局面での進化を考えるならば、初期スペイン語——ロマンセ——の音韻体系を取り上げ、アルハミヤダとの対照において然るべき考察を行わなければ、その方法論に問題点を残すことになる。以下、論をすすめるにあたっての視点は、次の三項目に要約できる。

- a) ロマンセと現代スペイン語は、音韻論、形態論、統語論上どのような隔りがあるか。
- b) ロマンセを用いていたモサラベは、アラビア語との接触により、彼らの日常言語にいかなる影響を受けたか。
- c) アラビア語を母国語とするモーロ人は、ロマンセの言語体系をどのように取り入れたか。

次にモーロ人によって発音され、表記されたロマンセの、音韻上、形態上、統語上の具体的側面を取り上げ、その言語学的解明を試みることにする。

①子音 $\ell\ell$ [ʎ] 有声硬口蓋側音は、子音 ℓ [l] 有声歯茎側音 + 母音 /i/ で発音された。estrellas > estrelias

これはアラビア語の母音 /i/ が、きわめて /e/ に近く、開母音的であるため、——古典アラビア語の母音は /a/, /i/, /u/ の三種類のみ——硬口蓋音化 (palatalization) をもたらす力がきわめて弱いためと考えられる⁽⁸⁾。

②子音 $\tilde{n}$ [ɲ] 有声硬口蓋鼻音は、子音 n [n] (有声歯茎鼻音) + 母音 /i/ で発音された。mañana > maniana

この現象も①と同じ分析で説明がつく⁽⁹⁾。

③母音 /i/ は一連の単語で、母音 /e/ で発音された。

higo > hego, chiquitillo > chequetilio

この /i/ > /e/ は、アラビア語諸方言に今日でもみられる現象であるが、③の

例の場合は、軟口蓋音に隣接する /i/ の開母音化として説明できる。

④母音 /u/ は一連の単語で、母音 /o/ で発音された。cuchillo > cochilio
この変化も③同様、/u/ の開母音化と説明できる。

⑤二重母音 /ue/ は単母音 /o/ で発音された。vuesarced > vosacé
アラビア語に二重母音 (diphthong) が欠如しているため、ロマンス諸語に分化する以前の俗ラテン語の母音体系——語根母音変化以前の母音体系——を用いた。

⑥二重母音 /ie/ は単母音 /e/ で発音された。viejo > vejo
これも⑤と同様の説明が可能。

⑦男性名詞と女性名詞の定冠詞の混同 la pasa > el pasa
アラビア語の定冠詞が *al-* であることから、女性名詞に女性冠詞 *la* を用いず、音形上類似した男性定冠詞 *el* を使用した。

⑧[p] 無声両唇破裂音を [b] 有声両唇破裂音で発音した。Pablo > Bablo
アラビア語の音韻に /p/ が存在しないので、アラブ人にとって [p]/[b] は異音 (allophone) である。

⑨[ts] 無声後歯破擦音と [ʃ] 無声硬口蓋摩擦音の混同 cebolla > xebolia
これは調声点の移動 (palatalization) 及び調音法の変化である⁽¹⁰⁾。

モーロ人の用いるロマンセを特徴づける以上の諸相は、次の三項目に要約することができる。

A) Archaism (古語法)

アルハミヤダ文献には、キリスト教スペイン以前の時代にイベリア半島で使用されていた古語が、多く用いられている。

B) Dialectalism (方言的用法)

アルハミヤダ文学は当時のイスパニア文学を規範とせず、方言的、日常的口語を基盤として成立した。ほとんどのアルハミヤダ文献は、アラゴン県居住のモーロ人に由来し、文献全体を通じてスペイン語のアラゴン方言——イスパニア東北の土地、昔のアラゴン王国の言語——の特質を顕著にあらわし

ている。

C)豊富なArabism (アラビア語風の用法)

arabismが語彙、意味、音韻、統語面にふんだんに使用されている⁽¹¹⁾。特に古典アラビア語の伝統的な文体が、アルハミヤダ文学をより豊かなものとし、その普及は口承文学的 (anonymous-collective) である。上流階級の文学がもつ複雑性とは対照的に、単純、素朴性が一貫して表現されている。

次に表記の体系に眼を転じてみると、いかなる人物、またいかなる地域においても、その表記体系が忠実に守られている。この厳密なまでの体系に対応させ、当時のスペイン語が綴られていたのである。とはいえ、若干の著者がおちいった誤りがある。それは、本稿第5節で扱う無声先舌歯摩擦音 [ʃ] と無声歯間摩擦音 [θ] の混同である。

(1)子音体系 (左側がアラビア文字と音韻、右側はスペイン語の対応)

- ا/a/ > 母音の補充として
- ب/b/ > BまたはV, پ/bb/ > P
- ت/t/ > T[t]
- ث/th/ > アラビア語の単語のみに
- ج/3/ > J[ʒ], ح/33/ > CH[ʃ]
- ح[h], خ[x] > アラビア語の単語のみに
- د/d/ > D[d]
- ذ/dh/ > Dに対応するが一般的には用いられなかった。
- ر/r/ > R, رr/ > RR[r]
- ز/z/ > Z[dz]
- س/s/ > Ç[ts]
- ش/ʃ/ > S-[ʃ]または-ss[ʃ], ʃʃ/ > x[ʃ]
- ص/s/, د/d/, ط/t/, ذ/dh/ > アラビア語の単語のみに
- ع/ε/ > 母音の補充としてではあるが、一般的には用いられなかった。
- غ/ʕ/ > G[g]
- ف/f/ > F

- ق/q/ > Q、あまり使用されなかった。
- ك/k/ > K, QあるいはC[k]
- ل/l/ > L, لll/ > LL
- م/m/ > M
- ن/n/ > N, نnn/ > Ñ[n]
- ه/h/ > H
- و/w/ > W
- ي/y/ > Y⁽¹²⁾

(2)母音体系 (左側がスペイン語、右側がアラビア語による扱い)

- A > fatha َ
- E > fathaに alifを加える ِ
- I > kasra ِ
- O > damma tanwinあるいはdamma ُ, ُ
- U > dammaあるいはdamma tashdīd ُ, ُ⁽¹³⁾

(3)その他の対応

A.単語の第一音節において、子音の連続は許されず——アラビア語で最初の子音が母音をもたないことはない——この場合、語中音添加 (epenthesis) が行われた。 blanco > balanco
(بَلَانْصُو)

B.一音節からなる語は、次の語に続けて書かれた。

un fraile > unfalaire⁽¹⁴⁾

C.二重母音がアラビア語に存在しないことから、スペイン語で二重母音をもつ単語に対し、間に半母音 (semivowel) を挿入した。 bueno > buweno⁽¹⁵⁾
(بُوَانُو)

D.孤立した母音は許されず、このような場合、アラビア語の子音 alifや ayn

また半子母 W や Y を補なった。el > 'el(ĩ) un > wun(ǔ)

5. 歯擦音体系からみたアルハミアダ

アルハミアダ文学の言語学的諸相を考察するにあたって、スペイン語の進化を歴史の流れの中でとらえることによって、これを位置づけなければならぬことは既に述べた。以下、まず最初に、ラテン語から現代スペイン語に至る歯擦音の変遷を簡略化して示し、これを整理したうえで、「モーロ人によるロマンセの発音と表記」に移る。というのは、アルハミアダにおける文字の借用が、いずれの時代のスペイン語であるかを示したいからである。

①スペイン語歯擦音の変遷

- a) ラテン語の文字“C”は、元来 /k/ 無声軟口蓋破裂音で発音されたが、/ca/、/co/、/cu/ はその後一定の地域で有声化し、有声軟口蓋破裂音 /g/ となった。
- b) /ci/、/ce/ は後続母音 /i/、/e/ によって硬口蓋化し (palatalization)、西ゴート時代のロマンセでは無声硬口蓋破裂音 [tʃ] で発音された⁽¹⁶⁾。
- c) さらに [tʃ] の調音点が前方に移動し (dentalization)、9 世紀後半には北部スペインで無声歯擦音 /ts/ となった。初期スペイン語では /ts/ に対応する文字は“ç”であった⁽¹⁷⁾。
- d) 初期スペイン語で文字“z”は有声歯擦音 /dz/ で発音された。
- e) スペイン南部では /ts/ の摩擦音化が 15 世紀初頭に始まり、この現象は後にスペイン北部にも広がった。/ts/ が歯間音 [θ] (interdental) となった 16 世紀には、/dz/ の無声音化 (devocalization) も始まり、ここに /ts/、/dz/ から唯一の音韻 [θ] が生じた。
- f) [θ] に対応する文字の統一がおこり、母音 /i/、/e/ の前で“C”、また /a/、/o/、/u/ の前では“Z”が定められ、現代スペイン語に至っている。
- g) 母音 /i/、/e/ の前の文字“g”及び /a/、/o/、/u/ の前の文字“j”のラテン語での発音は有声硬口蓋破裂音 [dʒ] であったが⁽¹⁸⁾、スペイン語 (castellano) の形成期に摩擦音化し、[ʒ] となった⁽¹⁹⁾。

h) 摩擦音化した“g”、“j”に無声音化が始まり、[ʃ] と発音される。この結果、文字“x”があらわしていた本来の無声硬口蓋摩擦音 [x] との混同をさけるため、/g/、/j/ の調音点が軟口蓋に近づき、現代スペイン語の無声軟口蓋摩擦音 [x] が生じた。

②モーロ人の歯擦音体系

- a) Ç [ts] 無声歯擦音を ʕ [s] (スィーン) で表記⁽²⁰⁾
Z [dz] 有声歯擦音を ʒ [z] (ザー) で表記⁽²¹⁾
- b) SS [ṣ] 無声先舌摩擦音⁽²²⁾ 及び S [z] 有声先舌摩擦音⁽²³⁾ を ʕ [ʃ] (シーン) で表記⁽²⁴⁾
- c) X [ʃ] 無声硬口蓋摩擦音を ʕ [ʃ] [ʃ] (シーンのシャッグ) で表記⁽²⁵⁾
J [ʒ] 有声硬口蓋摩擦音を ɛ [dʒ] (ジーム) で表記⁽²⁶⁾
- d) ch [tʃ] 無声硬口蓋破裂音を ɛ [dʒ] [dʒ] (ジームのシャッグ) で表記⁽²⁷⁾
- e) ll [ʀ] 有声硬口蓋側音を ɛ [dʒ] (ジーム) で表記⁽²⁸⁾

ロマンセの音韻 /ts/、/dz/ は、後にいくつかの地域——セビリヤなどのアンダルシア地方——では摩擦音化し、/ṣ/ や /ẓ/ と混同される現象もみられた⁽²⁹⁾。また反対に、/ṣ/ や /ẓ/ の破裂音化も地域によっては行われた⁽³⁰⁾。

③ロマンセにおける氣息音 (aspirated) の扱い

アラビア語の軟口蓋音や声門音 (glottal) には様々な摩擦音 (fricative) や狭窄音 (constrictive) が存在するが、当時のロマンセにはこれらの発音を示す表記が豊富ではなく、主に /h/ をもって氣息音を表していた⁽³¹⁾。それ故、これらアラビア語の摩擦音、狭窄音はロマンセにおいて、/h/ や /f/ で補なわれることになった。例として al-hauz > alfoz, al-xorǧ > alforja (alholi, alfoli), al-hamra' > alhambra, alfambra⁽³²⁾

§ まとめ

① スペイン語の変遷

C/k/ > Ć/tʃ/ > Ć/ts/⁽³³⁾ > Ć[θ] > C[θ]— Z/dz/ > Z/ts/⁽³⁴⁾ > Z[θ]SS/S/ ————— > SS[š]⁽³⁵⁾ ————— > S[s]

S/S/ ————— > S[ž] > [š] > S[s]

$$\begin{matrix} \text{G+i,e} \\ \text{J+a,o,u} \end{matrix} /d_3/ \longrightarrow /_3/^{(36)} > /ʃ/^{(37)} > [x]$$
y/d₃/⁽³⁸⁾ ————— > /_3/ > [ʃ]X/ks/ > /xs/ > /is/ > /ʃ/⁽³⁹⁾ ————— > /ks/⁽⁴⁰⁾ または j[x]⁽⁴¹⁾

② モサラベとアルハミアダ

mozárabe	aljamiada
ص[š] > Ć/ts/	ć/ts/ > س/s/
س[š]	
ز/z/ > z/dz/	z/dz/ > ز/z/
ح[h] > h, f[h] ⁽⁴²⁾	ss[š] > ش/ʃ/
ع/d ₃ / > j/_3/ ⁽⁴³⁾	s[ž] > ش/ʃ/
ش/ʃ/ > x/ʃ/ > j[x] ⁽⁴⁴⁾	x/ʃ/ > ش/ʃ/
	j/_3/ > ع/d ₃ /
	ch/tʃ/ > ě/d ₃ /
	ll[ʎ] > y/d ₃ / ⁽⁴⁵⁾ > j/_3/ > ع/d ₃ /

(注)

- 1) 西ゴード、アラブ人、ユダヤ人の共存がイスラーム・スペインにもたらした叙情詩にモアシャハ (moaxaja) がある。モアシャハは、アラビア語あるいはヘブライ語で10世紀ごろに書かれたもので、ところどころの部分——特に最後の一節——にロマンセで書かれたハルチャ (jarcha) と呼ばれる韻文を挿入したものである。詳しくは、Federico Corriente, *A grammatical Sketch of the Spanish Arabic Dialect Bundle*, Madrid, 1977を参照のこと。

- 2) 反復句 (estribillo) に四行詩の形態をもつ。そのうちに反復句は合唱、四行詩は独唱で朗読され、最終行は反復句と韻を踏む形になっている。
- 3) Alubadí, Aragon, Gayyū, Ruiz, Ramirez, Garsia など。
- 4) アラビア語の [d₃] (有声硬口蓋破擦音) はスペイン語で [X] (無声軟口蓋摩擦音) に対応する。また、アラビア語の定冠詞が “al-” であることも既知。/ʃ/ 国際音声学会の記号では /s/
- 5) ‘ajamīya は ‘ajamī の女性形。
- 6) モアシャハのなかには、ロマンセのみではなく、アラビア文字で書かれスペイン語の脚韻をもつ古代詩を含むものがあり、これらも同様にハルチャと呼ばれている。
- 7) イスパニア系ユダヤ人の言語についても、いずれ機会をみて取り上げたいが、ここでは若干の参考文献をあげることにとどめる。
M. Luria, *A study of the Monastir dialect of Judeo Spanish*, Rev, Hisp, LXXIX, 1931, 323-583
G.W. Umphrey and Emma Adatto, *Linguistic Archaisms of the seattle Sephardim*, Hispania, XIX, 1936, 225-264
F. B. Agard, *Present day judeo-spanish in the United States*, Hispania, XXXIII, 1950, 203-210
K. Kraus, *Judeo-spanish in Israel*, Ibid, XXXIV, 1951, 261-270
- 8) 母音 /i/ によって前の子音が硬口蓋化されるとき、この /i/ をロマンス言語学上では ⟨yod⟩ と呼んでいる。yod が、ラテン語がスペイン語に進化する過程で生じた現象であることを考えれば、モーロ人の音韻体系が、ラテン語のそれに従っていることがわかる。
- 9) 他方ロマンセにおいて、アラビア語の子音重複 (gemination) をどのように扱ったかについては、/l·l/ > /ʎ/, /n·n/ > /ɲ/, すなわち硬口蓋音化 (palatalization) で対処している。
annīl > añil, al-bannā ‘ (= 国際音声学会記号 ʔ) > albañil,
an-nafīr > añafil (スペイン語), anyafil (カタロニア語)
al-muṣalla > almuçalla (初期スペイン語), almocela (現代スペイン語)
これに対し、ポルトガル語では子音重複に対して、子音の単純化で対処した。
anil, aivanel, anafil, almocela.
- 10) 初期スペイン語において音素 [ts] に対応する文字は Ća, Ću, Ćo, Ci, Ce であった。しかしながら中世スペイン語では、[ts] の摩擦音化が南部スペインで顕著になり、この時代にモーロ人による混同があったと考えられる。さらに16世紀以後は、Ci, Ce があらわす音は [θ] 無声歯間摩擦音へと変遷し、現代に至っている。
- 11) 統語面においては、以下の特徴をあげることができる。
① 前置詞 “a” + 人称代名詞主格を、人称代名詞与格、目的格にかわって使用。

ayuntáronsele > ayuntáronse a él,

ya los encontraré > ya encontraré a ellos

②前置詞“de”+人称代名詞主格を、所有代名詞にかわって使用。

sus pisadas > las pisadas dellos

③重複強意法(pleonasm)の使用。

la vida del hermitanno > Su vida del hermitanno

④関係代名詞の前に前置詞を用いず、先行詞は後に「前置詞+代名詞」の形態で現れる。

la jarra en que yaze muerte > la jarra que yace en ella muerte

⑤関係形容詞“cuyo(a)”を使用しない。

la estrella cuyo lugar tú quieres saber > la estrella que tú quieres saber su lugar

⑥内含目的対格(cognate object)の乱用。

bramó Çeñeba muy fuerte bramido

⑦語順において「主語+動詞」の形態のほか、「動詞+主語」の形態がスペイン語やポルトガル語にみられる。

その他の詳細についてはT.B.Irving, *The Spanish Reflexive and Verbal Sentence*, Hispania, XXXV, 1952, 305-309を参照のこと。

12) 音韻の対応に関して若干の説明を加える。

a)現代スペイン語で無声軟口蓋摩擦音を示すホタ/j/は中世スペイン語では有声硬口蓋摩擦音[ɟ]、また初期には有声硬口蓋破裂音[dʒ]であった。

b)無声軟口蓋摩擦音のうち[h]は咽頭音、[x]は口蓋垂音である。

c)/s/が示すのは有声咽頭摩擦音

d)/ʃ/は有声軟口蓋摩擦音、[g]は有声軟口蓋破裂音

e)アラビア語の/q/は軟口蓋音ではなく口蓋垂音

f)Ñ[n̄]は有声硬口蓋鼻音

g)スペイン語の/h/は発音されない。またアラビア語の/h/は無声声門摩擦音。詳しくは「歯擦音の体系」の項で扱う。

h)スペイン語の/ʎ/は有声硬口蓋側音

1)アラビア語の単語のみに用いる音韻とは、すなわち、アルハミアダ文学の中にアラビア語自体を挿入する場合である。

13) アラビア語では子音の上下に印される記号がそれぞれ母音を示す。

“damma tanwīn”とは「子音+un」“damma tashdīd”とは「子音重複+U」である。

14) スペイン語のレオン地方の方言では、/pɛ/, /kɛ/, /bɛ/, /fɛ/などの子音連続において中和現象(neutralization)がおこっている。したがって fraile > flaileとなり、これが異化(dissimilation)と語中添加で falaire になったと考えられる。なおレオン方言——スペイン語で leones ——の特徴は12~13世紀にエストレマドゥラ方言

(extremeño)やムルシア方言(murciano)にも浸透した。なおレオン方言の研究について英文で書かれた文献は数少ないが、ここに次の2つをあげておく。

Yakov Malkiel, *The Five Sources of Epenthetic /j/ in Western Hispano-Romance: A study in Multiple Causation*, Hisp, Rev, XXXVII, 1969, 239-275. *Patterns of Derivational Affixation in the Cabraniego Dialect of East Central Asturian*, Univ of California Publications, Linguistics, 64, Berkeley-Los Angeles, London, 1970.

15) 反対に、ロマンセが母音に関して、アラビア語の表記をどのように取り入れたかについてみるなら、アラビア語の半子音(semi-consonant)の半母音化(semi-vowel)——y > i, w > u——を体系化していることがわかる。アラビア語の母音の借用は、さらに、カタロニア語、ポルトガル語で異なった過程を経ている。al-ḍay'a > al-daia > aldea(スペイン語、カタロニア語)、aldeia(ポルトガル語); as-sawt > as-saut > azote(スペイン語)、açot(カタロニア語)、açoute(ポルトガル語)

16) 当時のモサラベのロマンセ、さらに現代イタリア語、ルーマニア語の形態は、この進化で終わった結果である。

17) “Ç”は西ゴート文字“Z”に由来する。

18) 俗ラテン語では[dʒ]をあらわす文字に/y/を用いた。

19) 中世スペイン語において、[ʒ]は有声先舌歯茎摩擦音[ʒ] (voiced apico-alveolar fricative)、また[ʃ]は無声先舌歯茎摩擦音[ʃ]と混同されることがあった。

20) çibdat(ciudad), çinco, coração, moço, abraço, çierto, esperança

21) fazer(hacer), plazer, dezir, vezes, catorze

22) assi, gruessos, esso, missas, fallassemos

23) mas, vistas, señor, mis, buscar, después

24) これと反対の現象がモサラベたちの間にみられた。彼らは耳で聞いたアラビア語の単語を、きわめて類似したロマンセの音韻体系に適應させた。当時のロマンセでは、現代スペイン語の文字“S”は語頭及び子音に後続する場合——señor, pensar——、あるいは母音間においては——passar, esse, amasse——音素[ʃ]無声先舌歯茎摩擦音であった。したがって、アラビア語の[s]に対応する音素には、擦音化した[ts]無声歯破裂音を用い、文字上は“Ç”で示した。同様に、有声先舌歯茎摩擦音は母音間の/s/の音素であったから、アラビア語の[ʒ]の対応には[dʒ]が用いられ、文字上の/z/で示した。

25) dixo(dijo), dexō(dejó), Ximena

26) mejor, jentil(gentil), jornada, jente(gente), mujer

これは、今日“j”で示される音韻が“x”または“j”で表記され、発音上“X”が[ʃ]、“j”または“ge”、“gi”が[ʒ]、[dʒ]を示すように硬口蓋音であったことによる。(注18,19)を参照のこと。

- 27) mucho, noche, fecho (hecho)
- 28) この現象は“yeísmo”と呼ばれる。モサラベたちは $\ell\ell[\chi]$ を $[j]$ で発音したが、 $[j]$ に相当するロマンセの文字が“j”であったことから、モーロ人は $\mathfrak{E}$ (ジーム) をもって表記した。また $\ell\ell$ がレオン方言やカタロニア語で y になる現象も、同様に *yeísmo* とされる。
- 29) この現象は“seseo”と呼ばれている。*Seseo* が顕著な地域は、アンダルシア南西部で、従来の破擦音 $\zeta, C/ts$ や Z/dz から変遷した摩擦音が、先舌歯茎音の $[\zeta]$ や $[\zeta]$ と混同されたのがその由来である。しかしながら、18世紀以後は *Seseo* が広義で用いられるようになり、今日では θ に対応する“Z”や“C”を S の変異体 (variants) で発音する現象をも指すようになった。
- 30) この現象は“ceceo”と呼ばれている。
- 31) アラビア語の $\mathfrak{c}, \mathfrak{c}, \mathfrak{c}$ は国際音声学協会の記号では、それぞれ $[h], [\chi], [h]$ に対応する。
 なおラテン語における f の変遷 $f > h$ (aspirated) $> \phi$ は、ロマンス言語学上周知の事実である。
- 32) 軟口蓋音、声門音のロマンセにおけるその他の扱いとして、若干の例を示す。
 a) $g/\mathfrak{c}, /k/\mathfrak{h}$ の変遷: $\text{al-}^{\prime}\text{arabiyya} > \text{algarabía}, \text{shai}\chi > \text{xegue}$
 b) アイン ($\mathfrak{a}^{\prime}\text{in}$) の消滅: $\text{al-}^{\prime}\text{arab} > \text{árabe}, \text{al-}^{\prime}\text{arif} > \text{alarife}, \text{al-}^{\prime}\text{ard} > \text{alarde}$
 c) 完全消滅: $\text{tareha} > \text{tarea}, \chi\text{al}\mathfrak{t}\mathfrak{u}\mathfrak{q}\mathfrak{i} > \text{aloque}$
- 33) 後に摩擦音化し、15世紀には $[\zeta]$ と混同: $\mathfrak{c}\text{atan}/\text{satan}, \mathfrak{c}\text{enado}/\text{senado}$
- 34) 後に摩擦音化し、15世紀には $[\zeta]$ と混同: $\text{coser}/\text{cozer}$
- 35) 1763年まで。
- 36) $s[\zeta]$ と混同: $\text{vigitar}/\text{visitar}$
- 37) $x/\mathfrak{j}$ と混同: xugar (カスティーリャ) / jugar (トレド)
- 38) 俗ラテン: $\text{germano} > \text{yermano}$
- 39) $s[\zeta]$ と混同: $\text{moxca}/\text{mosca}$
- 40) cultism (ラテン語に従った語彙): $\text{examen}, \text{exención}$
- 41) $\text{caxa} > \text{caja}, \text{lexos} > \text{lejos}$
- 42) $[h]$ aspirated (氣息音)
- 43) 例として $\text{al-xor}\mathfrak{g} > \text{alforja}$
- 44) 例として $\text{shai}\chi > \text{xegue} > \text{jeque}$
- 45) (注28) の“yeísmo”を参照のこと。

参考書目

《英語》《フランス語》

A. Martinet, *The Unvoicing of Old Spanish Sibilants*, Romance Philology, V, 1951, 133—

156

- A. Steiger, *Origin and Spread of Oriental Words in European Languages*, New York, 1963
- B. Dutton, *Some new evidence for the romance origins of the muwashshahas*, Bull. of Hisp. Studies XLII, 1965, 73—81
- Diego Catalan, *The end of the phoneme /z/ in Spanish*, World, XIII, 1957, 282—322
- D.L. Canfield, *Spanish «c» and «s» in the Sixteenth Century*, Hispania, XXXIII, 1950, 233—236
- Gerold Hilty, *La poésie mozarabe*, Travaux de Ling. et de Littérature, Strasbourg, VIII, 1970, 85—100
- J.D.M. Ford, *The Old Spanish Sibilants*, Studies and Notes in Philology, II, 1900
- Lawrence B. Kiddle, *The Chronology of the Spanish Sound Change: $\mathfrak{S} > X$* «Studies in Hornor of Lloyd A. Kasten», Madison, 1975, 73—100
- , *Sibilants Turmoil in Middle Spanish (1450—1550)* Hisp. Rev, XLV, 1977, 327—336
- M.G. Newhard, *Spanish Orthography in the Thirteenth Century*, Ph. Dissertation, Univ. of North Carolina, 1960
- R.K. Spaulding, *How Spanish grew*, Univ. of Calif. Press, 1948, 233
- S.M. Stern, *Les chansons mozarabes*, Palermo, 1953
- Y. Malkiel, *The interlocking of Narrow Sound Change Broad Phonological Pattern, Level of Transmission, Areal Configuration, Sound Symbolism*, Arch, Ling, XV, 1963, 144—173
- , *Multiconditioned sound change and the impact of morphology on phonology*, Language, 1977, 757—773

《スペイン語》

- J. Caro Baroja, *Los moriscos de reino de Granada*, Istmo, Madrid, 1976
- A. Galmés de fuentes, “Interés en el orden lingüístico de la literatura española aljamiado-morisca” *Actes du Xe Congrès International de Linguistique*, Paris, 1965
- A. Gonzales Palencia, *Historia de la literatura arabigo-española*, Labor, Barcelona, 1945
- M.A. Ladero Quesada, *Granada: Historia de un país islámico (1232—1571)*, Gredos, Madrid, 1969
- R. Menéndez Pidal, *Poema de Yûçuf, Materias para su estudio*, Universidad de Granada, 1952

< Manuscripts >

① Colección de manuscritos toledanos:

- A. Gonzales Palencia, *Noticias y extractos de los manuscritos árabes y aljamiados. Miscelanea de estudios y textos árabes*, Madrid, 1915.

② Colección de la Biblioteca Nacional de Madrid:

— F. Guillén Robles. Catálogo de los manuscritos árabes, Madrid, 1889

③ Colección de la Escuela de Estudios Árabes de Madrid:

— J. Ribera y M. Asín. Manuscritos árabes y aljamiados de la biblioteca de la Junta, Madrid 1912

④ Colección de la Real Academia de la Historia:

— E. Saavedra. Índice de la literatura aljamiada. Madrid, 1872

— E. Terés Sádaba. Los códices árabes de la colección de D. Pascual de Gayangos Al-Andalus XL (1975)

(いしはら ただよし・創価大学助教授)